

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月27日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16739

研究課題名(和文) オーストロネシア語圏の言語多様性と生物多様性

研究課題名(英文) Linguistic diversity vs. biodiversity in Austronesia

研究代表者

西本 希呼(NISHIMOTO, NOA)

京都大学・人間・環境学研究科・特定研究員

研究者番号：10712416

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、科学と芸術をはじめとする人間の「知の体系」は、豊かな自然や生物多様性を根源とするという考えに基づいている。本研究では1992年以後ユネスコを中心とした国際機関が最重要課題の一つとして着目している、生物多様性と言語・文化多様性の相互関係を明らかにすることを目的とし、マダガスカル、トンガ、イースター島などの亜熱帯地域の島嶼国で現地調査を行い、現地の人々の生物遺伝資源の利用方法の調査を実施した。なかでも、植物利用に着目し、伝統医療に使われる植物に関して、映像ドキュメンテーションを記録し、アーカイブの準備を進めている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、トンガとマダガスカルを具体的事例として取り上げ、その地域社会の人と自然の関わり及びそれが投影された言語表現の収集を行った。言語多様性と生物多様性はどちらも相互に関連しているとされ、どちらか一方が失われると、もう片方も失われる。豊かな自然があるからこそ、その自然を題材にした歌、慣用句、感情表現が生まれ、その自然—例えばある固有種—が失われると、やがてその自然を用いた言語表現も消失する。本研究は、自然にまつわる博物誌の記録と保存に加え、言語多様性と生物多様性の相互関係を示す一つの資料とし、他の地域や言語を観察する際や、人間と生物とのかかわりを考察するために有益である。

研究成果の概要(英文)：This study is based on the idea that mankind's "system of knowledge," including science and art, originates from abundant nature and biodiversity. This study aims to identify the correlation between biodiversity and linguistic and cultural diversity, which UNESCO and other international organizations have considered to be one of the most important issues since 1992. The study included a field survey in island countries in subtropical regions, such as Madagascar, Tonga, and Easter Island, and a survey to investigate the ways local people use biogenetic resources. This study particularly focuses on plant usage, and progress is being made in recording video documentation of plants used in traditional medicine, and in preparing an archive. While video production is underway in the local language with English subtitles, time will be required for releasing the results due to sensitive issues relating to intellectual property rights, biogenetic resources, and portrait rights.

研究分野：科学社会学

キーワード：言語多様性と生物多様性 科学社会学 無形文化遺産 伝統知識・在来知識 植物利用 人と自然の共生 言語学 熱帯生態学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年になり、生物多様性の高い(低い)地域と言語多様性の高い(低い)地域が地理的に一致していることが指摘されている(Nettle 1996, Harmon 1995, 1996, Sutherland 2003 等)。Gorenflo et al. (2012) の研究によると、世界の 6900 以上の言語のうち 4800 の言語が生物多様性の高い地域で話されている事が明らかとなった。生物多様性の高い地域の生物の固有種が失われると、言語の多様性も消失する。言語の多様性が消失すると、生物に関する人の知識や自然利用も消失し、生物多様性と言語多様性は、相互に密接に関係している。危機言語の保存を重視している UNESCO は、先住民の言語と生物多様性の関連性にも着目し、先住言語を話す人々の数の動向が、2010 年生物多様性目標指針に登録されており、生物多様性条約の枠組み内に組み込まれた。オーストロネシア語圏に関しては、危機言語が多い事が同分野の研究者内では知られている一方、未記述の言語が多いため情報が乏しい。(Florey 2005, Adelaar 2010)

2. 研究の目的

本研究の目的は、(1)これまでに引き続きマダガスカル語諸方言、ルルツ語(仏領ポリネシア)ラパヌイ語(イースター島)の体系的記述を行い人称代名詞、限定詞、動詞形態論など同語族に特徴的な項目を重点的に分析をすること、(2)オーストロネシア語圏の他の地域を自然利用や生物に関連する語彙に限定して広域調査を行い、対象地域の生物多様性と言語多様性の関連性を明らかにすることである。具体的には、近年研究者及び UNESCO が着目している「生物多様性の高い(低い)地域と言語多様性の高い(低い)地域は一致している傾向がある点」、「生物多様性と言語多様性の一方が消滅すれば、もう一方も消滅する」という点」を視野に入れて調査を行い、オーストロネシア語圏における生物資源の利用とそれを反映する言語資料の収集と分析を行うことである。

3. 研究の方法

本研究は、現地調査に基づく一次資料を基に言語を記述することをベースにし、調査の際に「生物多様性の視点」から言語を観察することに焦点を置く。応募者が既に研究を進めている言語と、新たに着手する言語で方法を変える。既に調査が進んでいる言語(マダガスカル語諸方言、ルルツ語、ラパヌイ語)は、動詞文、譲渡可能・不可能の人称代名詞を用いた例文を集め、さらなる形態・統語分析を進める。また、自然現象や動植物に関連する民話やことわざ等の資料を重点的に集める。

4. 研究成果

仏領ポリネシアやイースター島等、研究開始予定当初に予定していた学術調査地の、現地協力者の体調や家族上の問題(出産し研究を長期的に協力することが困難になった等)航空券の高騰など様々な外部要因により、調査地は、オーストロネシア語圏ではあるが、マダガスカル、トンガ、フィジーへと変更となった。しかし、マダガスカルでは報告者が長年調査してきた基盤があることもあり、順調に調査を続けることができ、伝統医療や呪術に詳しい協力者から映像資料を入手することができた。トンガでは初回の調査から友好的関係を築くことができ、西洋医学では対処できなかった老婦人の病気を、古代からの伝統医療技術によって治療していく過程を調査し、トンガ伝統文化保存センターのスタッフとともに、トンガの植物利用 特に薬用植物を中心として一に関する詳細な調査を行うことができた。

しかしこれら得た資料は、現地の知的財産権や生物遺伝資源の適正利用といった様々な倫理問題がかかわり、得た情報を簡単に公開することはできず、現地の人との理解や、政府機関との交渉といった繊細な問題を抱えている。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 3 件)

西本希呼, 『人間の伝統的智慧と科学の経験 - 持続可能な世界の構築に何が必要か』, フィールドから学ぶ栄養と医術 - 架橋する伝統技術と現代技術, pp. 2-3, 2017 年 3 月. (査読なし)

西本希呼, 『我々は今, 真に科学と向き合っているのか』, フィールドから学ぶ栄養と医術 - 架橋する伝統技術と現代技術, pp. 20, 2017 年 3 月. (査読なし)

Noa NISHIMOTO, Number, Color, plant, and animal terms in Tandroy: The indigenous knowledge in Tandroy in Madagascar, Indigenous plant use forum, pp. 77-78, 56 巻, 2015 (査読あり)

[学会発表](計 5 件)

Noa NISHIMOTO, Utilization of biological resources in Southern Madagascar- A Sketch of the

Tandroy Maagasy's natural expressions, World Congress of African Linguistics, Mohammed V University, Rabat, Morocco, 25-28 August 2018.

Noa NISHIMOTO, Indigenous Knowledge as an Intangible Cultural Heritage: Interaction between Tongan and English , 16th International conference on minority languages , Finland, University of Jyväskylä, 28 August-30 August 2017 .

Noa NISHIMOTO, Counting and Expressing Numerals in Asian Languages: How people view their world, The 11th International Conference of the Asian Association for Lexicography, Guangdong University of Foreign Studies, China, June 10-12, 2017.

Noa NISHIMOTO, Body-part expressions and their semantic extentions in Malagasy, The grammar of the expressions of body parts (international conference), Catholic university of Peru, October 27-29, 2016.

Noa NISHIMOTO, Number, Color, plant, and animal terms in Tandroy: The indigenous knowledge in Tandroy in Madagascar, Indigenous plant use forum, 18th annual conference 2015 & society for economic botany, 56th annual conference, 28 June-2 July, 2015.

〔図書〕(計 4 件)

西本希呼, 『茨の国の言語 マダガスカル南部タンルイ語の記述』, 328 頁, 慶應義塾大学出版会, 2018 年

西本希呼, 名前が語る家族史, 『世界の名前』, p48-50 岩波書店辞典編集部, 2016 年

西本希呼 (編) 『フィールドワークの現場から』 梶茂樹退官記念集, 167 頁, 株式会社春日, 2016 年

飯田卓・西本希呼・深澤秀夫・RAZAFIARIVONY Michel 編著 『マダガスカルの民話 II』, p80-95, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016 年

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ワークショップ・国際会議等の企画運営

1. 西本希呼, 「美しさが生み出す芸術と科学」, 2019 年 1 月 16 日, 古仁屋、奄美大島 (一般公開講座の主催)
2. Noa NISHIMOTO (企画・運営) Special Seminar, 「東日本大震災から学んだこと」東京

農業大学林隆久教授による講演，2017年1月10日(火)，京都大学稲盛記念財団中会議室
3. 西本希呼 (研究代表者)「フィールドから学ぶ栄養と医術 - 架橋する伝統技術と現代技術」，京都大学学際融合教育研究推進センター・学術研究支援室後援，2016年12月13日，京都大学稲盛記念財団中会議室

4. Noa NISHIMOTO (企画・運営) Special Seminar, Austronesian culture history
Speaker, Professor Alexander Adelaar, 京都大学東南アジア研究所，2015年6月11日。

5. Noa NISHIMOTO (企画・運営) Special Seminar, Contact between Austronesian and African languages: a short overview, Speaker, Professor Alexander Adelaar, 京都大学東南アジア研究所，2015年6月10日。

テレビ出演

6. 西本希呼 NHK ニッポンのジレンマ，2016年10月30日 0:00 - 1:00，Eテレ出演 若手研究者4人の討論番組「文化と効率性のジレンマ大研究@京大」

ラジオ出演

7. 西本希呼，FM奄美、夕方サロン、2019年1月14日

新聞記事掲載

8. 西本希呼，南海日日新聞，2019年1月18日「美しさが生み出す芸術と科学」

9. 西本希呼，奄美新聞，2019年1月17日「美しさが生み出す芸術と科学」

10. 西本希呼，京都新聞，2017年10月27日「無文字社会から考える古典」

アウトリーチ活動

11. 西本希呼，数の認知 - 言語の構造から探る，京都大学エグゼクティブ・リーダーシップ・プログラム，ゲスト若手研究者[ポスター発表]，2018年6月30日

12. 西本希呼，無限の数と有限の数詞，京都大学エグゼクティブ・リーダーシップ・プログラム，ゲスト若手研究者[ポスター発表]，京都大学橘会館，2017年7月1日

13. 西本希呼，無文字社会の今と昔，京都大学白眉センター、年次報告会(人文科学代表) 2016年4月19日、京都大学芝蘭会館 [口頭発表・講演]

14. 西本希呼，「自然と人間 アフリカ諸国，オセアニア諸国の植物利用と生物多様性」，ジュニアキャンパス B6，2015年9月13日

15. 西本希呼，「フランコフォニ を知るう ヨーロッパ，アフリカ，ポリネシアのフランス語話者の人々の言語と文化」，ジュニアキャンパス A9，2015年9月13日

16. 西本希呼，京都大学サマースクール，「フィールド言語学入門」，2015年8月20日

受賞

17. 西本希呼 京都大学たちばな賞 2019年3月

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。